

無能力を補う能力？

——哲学の能力と無能力について——

オード・マルクヴァルト

(石川 求, 清水暁子, 澁川優太, 山崎紗紀子 訳)

〔訳者解題〕

本稿は、Odo Marquard: *Inkompetenzkompensationskompetenz?—Über Kompetenz und Inkompetenz der Philosophie*, In: *Abschied vom Prinzipiellen* (Reclam¹ 1981) の全訳である。2011年度の哲学演習でテキストとして取り上げた。授業には学部生も参加したが、とくに学期が終わってもお手伝いをいただいた大学院生を共訳者に挙げる。

論者のMarquardは1928年にバルト海沿岸の、現在はポーランドの領土であるボンメルン地区で生まれ、54年にフライブルク大学で博士号を得た後、ミュンスター大学のJoachim Ritterのもとで助手を勤め、同大学で63年に教授資格を取得、65年から中部ドイツ、ギーセン大学の教授、93年からは同大学の名誉教授として今にいたっている。著作としては現在までレクラム文庫(Universal-Bibliothek)で6冊もの個人論文集が出されているほか、さらに数冊のモノグラフィーが複数の出版社から刊行されている。十字勲章を含めた受賞も数多くあるが、くわしくは省略する。

極東のこちらでも哲学者が大眾週刊誌の人気コラムを永きにわたって担当するこのご時世であり、しかもそれを、その頁だけを、こっそり病院の待合室などで貪り読んで笑いをこらえている筆者のような忍びのファンもいるほどだから、今どき読者を笑わせる哲学者と言ってもさほど珍しくはないのかもしれない。しかし短見では、日々のよしなし事はいざ知らず、マジメな哲学を上品に？論じつつ、同時に読み手や聴き手を思わず吹き出させるユーモアのセンスに関してなら、このマルクヴァルトの右に出るものはまずいないのではなからうか。じつはむかし最初にこの原文を手にして卒読したとき、筆者はわけても冒頭の“枕”と末尾の“落ち”にみられる絶妙な議論転回や途中の語り口の面白おかしさに文字どおり眼を奪われたために、もしかしてマルクヴァルトという人は、哲学を大げさに貶しては偽悪的に内心で悦にいるいわゆる自虐ネタを駆使して、

ただ笑ってもらうために話し、そして書いているのではないのか……といった雑念さえつい空の頭蓋に思い浮かべてしまったものだ。しかしながら、告白すれば、それはまさしく非道い誤解であった。読者は、修辞を駆使した原著者の語り方に呪縛されてはいけない。注目すべきはあくまで語られる内容であることが、この一年間の演習における味読と、周辺著作の探訪からようやく筆者には明らかとなった。主題はいたって深刻であり、時間をかけてと言うか、とうの昔から考え抜かれている。「マジメな哲学」と述べたのは、何よりもその意味においてである。以下では、本文を読むうえでも参考になると思われるその一端を紹介して、過去にしでかした申し訳なき短慮の罪滅ばしに代えたい。

「補うこと *Kompensation*」や「〔資格〕能力 *Kompetenz*」への言及は、著者の処女作『カントを念頭においた懷疑の方法』¹の冒頭の頁からじつは始まっていた。人間とは何か、人間に何ができるのか。この問いは、マルクヴァルトにとって、哲学とは何か、哲学に何ができるのか、という問いと切り離すことができない。別のところでは人間がずばり *homo compensator* と定義されている。私たちが有限であり、不完全であること。哲学の出発点は、いかなる神学とも無縁なこの人間学的事実である。私たちは根本的な欠如や不足のゆえに、あるがままには生きられない。何らかのしかたで当の不足を補う必然性がここから出てくる。例えば言語によって本能の欠陥を埋め合わせる必然性が、ラテン語の *compensare* は、天秤の片方の皿に重りを「投げ入れ *pensare, pendere*」て、二つの皿を「共に *com*」釣り合わせることに由来するという。ギリシア語に遇れば *syn + ballein* であり、とすれば *Kompensation* はあの *Symbol* とも同根ということになる。記号は、あるものの代わりを務める。生きるために人間は、本能の代わりを務める言語をどうしても必要とする。極論すればこうも言えよう。言語を操る人間は自分自身をすら補う。ひとはみな“本人”の替え玉であり、ダミーである。だから人間世界に原物や本家本元は存在しない。マルクヴァルトが一貫して頼りにする思索法としての陽気な懷疑は、極めつきや唯一無二の絶対を額に皺よせ求めんとするテツガク的な営みが、私たちの限りある人生をどれほど陰気に、憂鬱に、駄目にするかをあらゆる角度から明らかにしようとする。本論文が収められた本のタイトルにもなっているが、まさに「原理的なものからの訣別」——要するに反テツガク——が彼の哲学的テーマである。

かつて戦後ドイツの哲学思想界でアドルノらのいわゆる批判理論が一世を風靡したとき、マルクヴァルトはその流派が批判それ自体を絶対化しているとして敢然と反旗を翻した。現代の神へと祭り上げられた「批判」への徹底した嫌悪は本論文にも強くみられるが、相手側からはこうして「保守派」とのレッテルが貼られることにもなった。彼の

1 *Skeptische Methode im Blick auf Kant*, Alber 1958.

懷疑が保守への傾向をもつことを当人も否定はしない。しかしそれは、ちょうどどんな外科医も手術の前に、患者のまだ使える内蔵組織を何とかして残そうと熟慮するように、ないものをねだるのではなく、すでにあるもので最善の努力をする、という意味での保守的な扱いを目指す。人間の不足は、「ないもの」によってではなく、それがどれほどなけなしであろうと「あるもの」によってのみ補われうる。懷疑はたんなる否定ではない。それはむしろ限りある自己の保存であり、限界の内在的な肯定である。懷疑は、いまだなき未来を見越した現在の悲観ではなくて、これまでも辛うじて生きてこられた現在の、手を尽くした楽観にほかならない。だから「陽気」なのである。

この論文は1973年、哲学者の Hermann Krings 60歳の誕生日に合わせてミュンヘンで行われた講演——さぞかしフロアは笑いの渦が絶えなかっただろう——をもとにしている。著者に翻訳の許可をいただくため、ギーセンのお住まいに恐る恐る手紙を書いてみた。すると間もなく、もはや懐かしき手押しのタイプライターによる返信が筆者のもとに届けられた。いささか乱れた印字から、84歳になって視力が衰えたお爺さんが、かたじけなくも自ら手探りでキーを叩いていることが判る。「あなたたちの翻訳の印刷を喜んで認めます。翻訳してくれてどうもありがとう」との文章から始まり、続いて老齢による身体の不自由と、専門用語のためかこちらもよく理解できない複数の病状のことを淡々と書かれて、最後に「もうあまり正確ではない私の手紙を用心して読んでくださるように」とあった。この人は、いやこの人こそ、自らも至上のユーモアを生き続けておられるのだ、と深く感じ入った。敬愛するマルクヴァルト先生の末永きご長寿を心から願ってやまない。

すでに英訳²が存在し、これには原注にはない訳注がいくつか付加されてもいて大いに参考となった。また、原文にあるかなり長大な段落は、ほぼ英訳にしたがって細分した。なお訳文中の〔 〕は訳者による補足である。

最後に、本論文はかなり有名なこともあり、訳者は相応の覚悟を必要とする。ウィットが満載となればなおさらだろう。ジョークや洒落が分かっていないと言われるのがどれほど辛かろうとも、分からずにはおれない。それ以外の箇所についても、通曉する諸賢のご教示を賜ればまことに幸いである。

訳者を代表して 石川 求³

2 Competence in Compensating for Incompetence? (On the Competence and Incompetence of Philosophy), In: *Farewell to matters of principle: Philosophical studies*, translated by Robert M. Wallace with the assistance of Susan Bernstein and James I. Porter, Oxford University Press, 1989.

3 iskwmtn@tmu.ac.jp

はじめに

中国の故事にこんな話が伝えられています。むかし死刑執行競争の決勝戦があり、片方がピンチを迎えた。先に死刑を執行してみせた彼の競争相手によるほとんど完璧な打ち首の刑を技で越えなければならなかったのである。緊張の一瞬。彼は鋭いひと太刀を振るった。のだけれども、打ち首にされるべき者の頭は落ちることなく、だからまだ打ち首に処せられていないようにみえる死刑囚が、死刑執行人をなぜなんだという驚きの眼でみつめた。すかさず執行人は当の頭に言ったそうです、「頷いてくれよ」と。

私にとって興味深いのは、この頭が頷く前に何を考えているか、ということ。なぜなら、それは哲学が自分自身について考えていることに似ているに違いないだろうからです。

お祝いの機会を、それもクリングス先生へのそれを、死刑執行競争を想起させて汚すのは不謹慎に思われるかもしれません。とはいえ、結局のところこの場にお集まりなのは哲学者であって、それが疑わしいとしても、私が言っていることはお分かりです。なるほど、仮そめにも頭は哲学者の道具なのだから哲学者が頭をもっていること、そして私自身を除けば哲学者が〔頭をもっているだけでなく〕頭であること、このことは争う余地がないでしょう。けれども、これらの頭はどのくらいしっかりと乗っかっているのでしょうか。この点は、哲学の能力と無能力について話すよう主催者により命じられている場では実際に問題になります。あるいは、もしかするとこちらの方がより切実かもしれませんが、少なくとも喩えとしては問題になる。さらに、もてる能力のラディカルな削減による哲学の断頭という運命について、哲学がどうやらまだその頭を上に乗っけているらしいという事実とからませて話さなければならない場所では、もはや避けられないものとして問題になるのです。私は、これについての私の考えを以下、二つの章で述べようと思います。第1章ではその能力が削減されるという視点から、第2章ではその削減分を補うという視点からお話します。

1

それでは差し当たり二、三、概略的に哲学の能力の削減について述べます。ここで能力 *Kompetenz* とは何を意味しているのでしょうか。私としては、言葉をこれと競合する語の領域のうちに位置づけようとする類語辞典と文献学的に触れ合うことも、法律用語史の研究者と法学的に触れ合うことも、胚胞の研究者と生物学的に触れ合うことも、チョムスキーと言語学的に触れ合うことも、ハーバマースとコミュニケーション論的に触れ合うことも何もかも一切なしに、当面その「能力」という概念についてはできるだけ曖昧にしておきます。能力は、資格 *Zuständigkeit*、才能 *Fähigkeit*、やる気 *Bereitschaft* と何らかの関係があるようですし、そして資格、才能、やる気はたがいに結びついているわけですが、まさしく哲学にあっては初めからこのことを無条件に当てにできるわけではありません。というのも、何の資格ももたないのに、それなりの才能はあって、やる気は満々という哲学がいつもすでにあったからです。哲学についてのこうした診断は全面的に正当であるのかどうか。2千年前にはそれは〔実際に〕論じられるべき問題とはならなかったのですが、今日ではそれは論じるに値する一つの問題となっています。そのようにして初めから歴史は、哲学とその能力について熟慮するようになります。哲学の能力が何であるかを哲学に告げるのは哲学の歴史だけであり、でも進歩とはその能力の減少であったことを歴史は哲学に告げている。哲学の歴史は、哲学の能力を削減する歴史なのです。

哲学の歴史、その〔能力〕削減の物語をいま時間の関係で思弁的なショート・ストーリーとして表現すれば次のようになります。はじめ哲学はすべてのことに対して能力をもっていた。それから哲学は若干のことに対して能力をもつようになった。ついには哲学はもはや一つのことに対してしか能力をもたない。つまり、自分が無能力であることを白状することに対してである。そして結果としては、哲学はそのつらい人生の中で、少なくとも三度、絶体絶命の挑戦を受け、しかも買い被られながら、最後にはくたくたにさせられ、衰弱させられ、能力あるものによって、しかもたがいに能力を争うようなライバルによって、レースから放り出されることになりました。まず最初、聖書から救済論の挑戦があった。そして、その後ブルジョワおよび、い

かがわしくポスト・ブルジョワと呼ばれる人々からは、技術と政治の挑戦があった。救済論の挑戦は哲学に人間を救済へ導くよう求めました。しかし、キリスト教が哲学に勝利したとき明らかとなったのですが、哲学にはそれができなかった。だから、哲学の救済能力というのは終わってしまい哲学は失業してしまった。哲学はしばらくの間、神学の端女 *ancilla theologiae* として雇ってもらいました。技術の挑戦は哲学に人間を有用な学問へ導くべきだと求めた。しかし、精密科学が哲学に勝利したとき明らかになったのですが、哲学にはそれができなかった。だから哲学の技術能力というのは終わってしまい哲学は失業してしまった。哲学はしばらくの間、科学の端女 *ancilla scientiae* として、つまり科学論〔学問論、知識学〕として雇ってもらいました。政治の挑戦は哲学に人間を公平な幸福へ導くべきだと求めました。しかし、政治的实践がその行動力によってであれ、実行可能性と制度設計に対するそのセンスによってであれ、哲学に勝利したとき明らかになったのですが、哲学にはそれができなかった。だから、哲学の政治能力というのは終わってしまい哲学は失業してしまった。哲学はしばらくの間、解放の端女 *ancilla emancipationis* として、解放の下女（あるいは、男女平等を考えて召使いと言いましょ）として、つまり歴史哲学として雇ってもらいました。

この哲学の買い被りと喪失の歴史のなかで、救済と技術と政治に対する有用性に関してともかく哲学のうちで見出されえたもの、またひょっとしたら見出されうるものを別々に抜き出してくることに意味があるのかどうかさえも疑わしいものとなりました。哲学は健全な人間知性と冷静な理性を、本当ならば日々の現実にもとづいてそれらをもたなければならないはずの人々に抗ってでも守らなければならないんだ、そして、本当にそれが必要なら守ることができるんだ、などという言い分はプロの哲学者の敬虔なる願望にすぎないと私は思っています。むしろ、哲学は誤った道に迷い込むことを防ごうと守りだと考えている人はいます。しかしながら、ニールス・ボーアが語る有名な逸話において重要な意味をもつ例の蹄鉄⁴とは正

4 [原注] 現代の哲学的な志向をもったすべての自然科学者の逸話は、最終的にはニールス・ボーアの逸話のようになりやすい。ここで言っているのは、扉に〔魔除けの〕蹄鉄が打ち付けてあったボーアのスキー小屋に訪問者があったときのエピソードである。その訪問者は蹄鉄を指してボーアに尋ねる。「自然科学者であるあなたがこれを信じているのですか」。ボーアは言う。「私はもちろん信じていませんよ。でも、蹄鉄を信じなくとも、蹄鉄に効果があることは保障済みでしょ」。

反対で、人が哲学を信じるときでさえ、そしてまさに信じるそのときに哲学はそもそも役に立たないのです。

役に立たないというのは、いわゆる処世訓のことであり、哲学はとにかく一度としてこの能力を独占したことはなかった。処世訓が語ることに關しては、前々から少なくとも詩人が哲学のライバルでした。だからして、哲学がまだ若い人のための人生訓、つまり、人生の未経験者のための、人生の未経験者による人生経験のシミュレーションであると定義されうる場合にそれがもつ特殊技能でさえも危険に晒されているように思われるのです。今の場合では生物学的な過程が当の能力に痛手を負わせることになる。つまり、たとえ気づかれずとも、哲学者でさえともかく歳をとり、そのときには——以下は私の当座の推測でしかなく、年中そう思っているわけではありません——哲学者は哲学を現実の人生訓で代用することができ、もはや哲学者は哲学を必要としなくなります。なのに、まだ人生を経験していない人のための人生経験にはなる、つまり、いまだ若い人にとっての人生訓になるということは、結局のところ哲学を部分的に定義しうらただけではなく、次のようなときには、実際にそれが〔哲学というよりは〕人文科学の定義になるのです。すなわち、人文科学が想起させるべき課題をもち、またまさにそれゆえに——これは人文科学にとって名誉なことではあるのですが——人文科学が攻撃されているときには、なぜ攻撃されているのかというと、リスクを冒して改革がなされる際、ひとが〔過去の〕想起を禁止することによって損得勘定における自身のリスクを減らしたくなるのはもっともなことだからです。では哲学は想起させることに關して人文科学に勝るのでしょうか。いや、そんなことはほとんどない。このようにして、哲学の能力の喪失のゆえに、哲学が前世紀いらい期待を寄せていた想起させる諸学問のうちで哲学にとってライバルが成長してきた。この相手は、ひょっとしたら哲学にとって最後かもしれない能力、つまり想起させる能力に疑問符をつける。哲学の能力は見たところ尽きてしまい、結果として哲学はどうとう無能力になるのです。

これは、以上のあらゆる問いに關して、哲学はもはや何ひとつ語るべきものをもたない、ということを行っているわけではありません。しかし、哲学は主として見込みのない能力者となったのであり、ひいき目に見ても

二番手の役割しかないのです。一番手が実際に良いものであり、さらにけっして具合が悪くならないとしたら、哲学という二番手の役割があることは何の役に立つでしょう。哲学は終わった。哲学の終焉の後にわれわれは哲学を営んでいるのです。どうしようか？——ここで「地球の分配」と題された詩を引きましょう。作者はレーニンではなくシラーです——、どうしようか、とゼウスは言った、世界はみんなにくれてしまったよ。けれどもシラーにおいては、ゼウスがそのときなした唯一の建設的な援助の申し出は詩人に向けてであって、哲学者に向けてではなかった。けっして哲学者を助けたわけではないのです。事態は〔シラーの詩が書かれた1795年から〕変わっていない。哲学の能力の現状報告、それはダメ出しのオンパレードです。

とはいうものの、本当にそうであり、そうでなければならないのでしょうか。私は、哲学にとってたんなる残りかすの能力とは言えないような、ひょっとするとかなりの能力があるかもしれない、ということ喜んで認めましょう。しかしながら、それについて話をするだけの能力が私には、まったくもって私個人には足りないのです。というのも、〔第一に〕私には資格がないし、〔第二に〕才能がないし、〔第三に〕せいぜいのところ話したい気があるくらいのものでからです。そこで私に簡単な説明をさせてください。まず〔第一に〕私には資格がないと言ったのは、少なくともマナーの上での理由からです。ここミュンヘンのお歴々が、もしかしたら唯一この方々だけが、自らで知っているような能力を評価するために、私のような余所者を必要としているというような印象を〔世間に〕わずかでも喚起するとすれば、それは無礼となるかもしれません。つまり、ヒンターボンメルンに生まれ、東フリージアから“強制移住”してきた男で、フォーゲルスベルク地方の山麓でいかがわしい生活を過ごし、それゆえいづれにせよ南部ヘッセンの伝統的風習が持つ頑固者の気質については資格がある、そういう余所者を必要としているというような印象を喚起してしまうことは、

〔第二に〕私にはこのような能力を評価する才能もないと言ったのは、じつさいのところ評価できないという理由からなのです。つまり、〔ギーゼン大学の哲学および科学基礎論センターという〕私の職場はとにかく、素朴であることを研究する場所ではなく、ただ、失われた素朴さを追い求めるための研

究所、すなわち集結せる困惑のための研究センターでしかありません。ここに勤める〔私のような〕哲学者は——これを私たちは〔素朴哲学者ならぬ〕情感⁵哲学者と呼びましょう——、テオーリアすなわち観想が苦手で、つまり、驚きから生まれる観想が苦手なのです。また、善き世界に対するあの感謝が苦手で、つまり、世界の真善美の秩序を眺めやることを促すような例の、誰に捧げるのでもない感謝が苦手なのです。彼はつまり悪しき驚き手なのです。というも、この哲学者が真に驚くただ一つのこと、信じがたいけれど今のところ生き延びた、ということだけだから。

にもかかわらず〔第三に〕私は哲学に残っている能力について話してみたい気はあります。哲学の能力喪失のこうした全過程はもちろん違ったふうにも読むことができます。つまり、それは没収の歩みとしてではなく、軽減の歩みとしてです。というもひょっとしたら哲学にとってこのような義務喪失は、実は自由の獲得であるかもしれないからです。哲学の追放は哲学の免責を意味しうるのです。すなわち、哲学が今や何もしなくてよいといえれば、それはまさに今や何をしても許されているということが意味されうるでしょう。そういうわけで、哲学には色々なものが残っているかもしれない。というも、いまだ哲学には争う余地のないテーマが存在しているからです。それは哲学史と、言うまでもなく論理学です。もっとも論理学と言っても、数学と共生している論理学のことです。概して、共生するということは大切なことなのです。とりわけ、個々の科学の土台となる哲学にとっては大切です。これら個別諸科学において、ハイデガーの言い分によれば、哲学とはそれらの土台の危機に対処する技能というほどのものです。つまり、個別科学の土台の危機管理が、哲学の残された課題である。しかし、誰が実際これに対して能力をもっているのか。純粋な哲学者でしょうか。あるいは、そのつど関連する科学の、科学者自身でしょうか。純粋な哲学者の時代は過ぎ去った。哲学者が純粋さにこだわるときには、哲学者は結局、哲学を失うことになるのです。ではそうであるなら、諸科学を基礎づける哲学の能力はどうなっているか。この点については明らかに疑いうるし、疑いが提起されているのです。

5 〔訳注〕このあたりは、シラーの著作『素朴文学と情感文学について』（1795-96年）が仄めかされている。

私は、それをじっさい率直に述べようと思います。つまり、一つには当然のことなのですが、哲学に関するこのような講演会において、ただ心強いことや、大喜びすることだけが語られるのであれば、芳しくない印象を与えることになるだろうからです。そしてもう一つには構成上の理由で、いわば韻律上の理由からなのです。つまり、あの有名なイタチ⁶のように、韻を踏むためには人は何だって行うからです。私が差し当たり、哲学の能力のラディカルな削減の物語を主張し続けることに固執せず、それゆえ、次に述べることを強調して主張することに固執しなかったら、私の考えることは何の特徴ももたず、何の転回も持たなくなってしまうでしょう。そういうわけで、私はあの文句をまた繰り返して述べるわけですが、まずはじめ哲学はすべてのことに対して能力をもっていた。それから哲学は若干のことに対して能力をもつようになった。ついには哲学はもはや一つのことに対してしか能力をもたない。つまり、自分が無能力であることを白状することに対してである。一つのことにも能力をもつと言っても、哲学に残されているのは全くの無なのです。つまり、純粹で、混じりけのない、むき出しの無能力です。さらに、哲学に残されているものは、ソクラテスを引用すれば、たった一つのあるかなにかの些細なことです。もっとも、ソクラテスが言ったのとは違った意味での些細なことであり、哲学を困ったものにしないどころか、完全に困ったものにする、そういう些細なことなのです。根本的に無能力になってしまった哲学を念頭におきつつ、哲学のもてる能力を私はこう名付けたいと思います。すなわち無能力を補う能力と。

2

このことに関して、すなわち、この無能力を補う能力に関して、二つの序論的な意見、二つの中間意見、そして結論的な意見を述べたいと思います。今となっては皆さんもうすうすう気づいていることは存じますが、私

6 〔訳注〕Christian Morgenstern (1871-1914) の滑稽詩「美的なイタチ *das ästhetische Wiesel*」に描かれている主人公のこと。イタチがどうして小石 *Kiesel* の上に座っていたのかと掛けて、それは韻を踏むためだったというナンセンスな落ちがついている。

は自分のテーマ、すでに述べたようにそれは主催者側から指定されたものですが、そのテーマをやや独特なやり方で解釈しました。ここで私に興味を惹くこととは、哲学の無能力が占める限りなく大きな領域とその能力が占める限りなく小さな領域との境目なのではなく、まさに、境目のなさ、すなわち能力と無能力との混合なのです。そしてまさにそのような、哲学における混合こそが、無能力を補う能力と私が呼んでいるものなのです。ではそれについて最初に二つの序論的な見解を述べましょう。

a) 哲学におけるこの無能力を補う能力は、哲学の無能力と大いに関係があります。というのも、補うということは何か欠けているところにしか必要ないからです。だから哲学の無能力を補う能力は、まずさしあたり、哲学の無能力の兆候なのです。

b) もし、哲学がたんなる無能力であり、能力への郷愁もないのならば、この無能力を補う能力だってないでしょう。みな郷愁を語っている。私もそうです。哲学は自分が何ものであることに憧れていますし、以前は何ものかだった。そのことを忘れられないのには以下のような理由もあります。すなわち、用無しになった今でも自分が何ものであると自ら信じ込んでいるからです。哲学はたしかに無能力であるという点では本当に不必要なものです。しかし哲学はたんに用無しではなく、かつての能力への郷愁と共に、不運にも有用であることに恋い焦がれている。純粋な用無しに引き下がることに哲学はまったく耐えられない。そのことは差し当たり、とくに感動的な現象によって、すなわち無給の副業に対する哲学者の熱狂によって証明されています。人間は仕事をする動物であり、哲学者は副業をする動物である。つまり、哲学による専門外での自分探しが盛んになっているのです。ところで〔余談になりますが〕、法学もどきに対する哲学の偏愛という、このよく知られた事象は、哲学から追い出された数学によるひそかな復讐にほかなりません。つまり、数学が哲学から姿を消した所に空白が生まれ、そして哲学者、そして哲学者だけが法の論理であると考えているものが、その空白に侵入しているわけです。〔話を戻しますと、〕哲学者はじっさい色んなものになります。自己管理の賛美者、原理の統計学者、企業の顧問やオペラの顧問、諸学の観光客、諸学をまたぐアスリート、プランや規約・法律の作成者、完全透明化の不透明な親玉、すなわち

情報公開の黒幕、各地域で魂を癒す人そして直接間接を問わず市町村の政治家、人物鑑定をして紙の洪水を生み出す人、社交界の脇役、などなどになるのです。つまり、哲学はここにおいて、つまり自分が活動している証拠を循環器障害に求めながら心筋梗塞へと至る存在において、ゲーレンが過労への逃走と名付けた営みをいつもやっています。すなわち、我呻く故に我あり、しかも有用なり。

だから用無しであることも弁明の口実として、たとえ完全ではなくとも慰めを与えることになります。なぜなら哲学者たちは今日、能力への郷愁から有用さに憧れて止まない用無しとして生活し、こうして彼らにできご奉仕を必要とあらば副業によって果たすからです。ただしそれは、用無しの有用性の理論が付け加わるときにかぎられる。例えば、かつて上流階級の人々において休暇が〔主人ではなく〕奥さんや使用人によって果たされていたという、ヴェブレンによる「代行的閑暇」の概念を哲学者たちにも広げることによって、じじつ哲学者たちはしばしばこれと同じだからです。つまり、上流階級の人々を探す代行的暇人となります。ゆえに哲学者たちは支配者たちの家に滞在すること好み、将来の支配者たちへの滞在はもっと好み、今からもうすでに支配している将来の支配者たちへの滞在ならいちばん好むのです。場合によっては、哲学者みずからが〔支配者となって〕自分自身の家に滞在するという限界的ケースもありうる。哲学者は——もっともこの役割においてもとつくのむかしに他に凌駕されてはいますが——ステイタス・シンボルとしての食客となります。そのことで哲学者は、——主人の管轄においてであろうと、代行者の管轄においてであろうと、少なくともここでは同じことです——以下の事実をすら象徴している。すなわち、ある人の生が他のだれかの死であり、つまり、生きることは他者を苦しめることによって、自由は奴隷によって、平等は差別によって、配慮は無視によって、幸運は不運によって生かされる、いずれにしてもそうであり、どのみちそうでないことなどないという事実を、寄生することはつねに当然なりというこの命題を妥当させたくはないのにもかかわらず、もちろんのこと寄生している、これこそが哲学なのです。哲学が良心をもっていれば、そのことが哲学を苦しめる。哲学は能力を失ったのに、でもこのさい何らかの能力をもってしかるべきだという思いを失っていないのな

ら、哲学はこの苦しみに直接、ということとはつまり無防備にさらされてしまうのです。この、私が能力への郷愁と名付けたものがその苦痛を表現し、そしてその苦痛を補うことへと誘導するのです。

哲学はこの苦痛に直面し、やけくそになって自分自身でなくなろうとするか、あるいはやけくそになって自分自身であろうとすることのいずれかによって、自身をなだめる。そしてこれは、哲学が能力への郷愁にかられるとき、哲学が能力を消すか郷愁を消すかのどちらかを行うということの意味しているのです。哲学は、能力逃亡者となって能力なき郷愁を追い求める、すなわち美的な感情によって絶対的な無能力を追い求めるか、あるいは能力に居座り続けるものとなって郷愁なき能力を追い求める、すなわち尊大な主張によって絶対的な能力を追い求めるか、のどちらかなのです。そのために哲学は、良心をもつことからくるあの苦痛から次のように逃げ出そうとする。すなわち、哲学が良心による告発の際にも哲学が被告とならないか、そうではなく原告となるか、あるいは責任者とならないか、それとも自身が責任を追及する者となるように努力することによって、つまり哲学は、良心をもつことをやめて、まったく価値のないものの変種へと逃げるか、あるいは自身が良心であるということへと逃げ込んでしまうのです。良心をもつという上述のことに直面して哲学が無能力を補う仕方は、ここからあの完全なる無能力へ、すなわち哲学はまったくプレゼンスがないという無能力へと逃亡するのか、あるいはそこからあの完全なる能力へ、すなわち哲学は絶対的な世界良心になるという全能へと逃亡するのかのいずれかなのです。そのとき哲学者とは、たんなる阿呆であり、たんなる裁判長であり、あるいはそのどちらか一方なのでしょう。もしもこれが本当に選言であるとするならば、無能力を補うことに関して私が考えてきたこれら二つの可能性、すなわち絶対的審級へと哲学を単純化することと、かろうじて生ける虚無になろうと哲学が自己変身すること。これらは基本的には哲学において古くからある独断論と懐疑論という二分派に取って代わり、それを引き継ぐものですが、この二つの可能性について今から二つの短い考察で順々に特徴付けをしたいと思います。

a) 独断主義は、今日では自らを批判と呼んでいます。そして、私が言っ

たように、独断主義とは、良心をもつことから良心であることへの逃亡によって哲学が全能となる立場のことです。フロイトにおける超自我の効用理論では、このかなり不気味な関係がほのめかされているように私には思えます。つまり、良心になる者は誰でも、そのことによって良心をもつ必要を免れることができるという関係のことです。あってはならないことですが、でもそれは、なぜ批判が批判のために魅力的となるのではなく、まさにこの良心をもつことを回避することによって責任の軽減をもたらすものとしてよく魅力的となりうるのかを説明します。

またそれゆえに批判の内輪では、人は責任の軽減について話してはいけません。つまり、それは批判の弱みを突きすぎているのです。批判は、すべてに嫌疑をかけ、すべてを起訴し、そしてすべてを裁く。批判はすべてを裁きつつ伝統の内部を歩む。というのも最初に、宗教において神が人間を裁くからです。次に、弁神論において人間が神を、さらに、批判において人間が人間自身を裁くからです。したがって批判の法廷は自己を裁く法廷であり、それは骨が折れる。そのため批判は、裁判の際に被告になるのではなく、原告になる逃げ道を選びとる。裁かれないために、批判は裁くことによって自分の責任を軽くする。つまり批判とは、批判自身があの超自我に、すなわち他の者だけが超自我をもっていて自分自身はいかなる超自我ももつことがないような、そうした超自我に自らがなることを通じた、超自我からの解放なのです。そうして、すでに批判だけが、自己の批判によって有罪判決を受けるという状況を免れてきました。そのような状況にあるのは、だから他者なのです。有罪判決を受ける者になるのはすべてそのようにして他者であるという仕方で、そして批判としての哲学それ自身は絶対的に訴えられえないものとなるという仕方で、批判は絶対的にそのような状況を免れているのですが、その絶対的に訴えられえないものなどというのは、人間の本来ありえない姿です。つまり、それ自身はただ裁くだけであり、そして他者だけを裁くのであるから、もはや裁かれることのない絶対者という姿です。かつて哲学は良心を「もっていた」、しかしいまや哲学は絶対的な先頭者であるという仕方で、良心を追い抜いてしまっている。要するに、良心を「もつ」代わりに、哲学は良心「である」、それも絶対的な良心である。

こうして哲学は一個の専門領域としての哲学という制度的な枠組みには当然ながら収まりきれなくなるわけです。哲学を研究センターへ組織化することは、たとえどれほど有用でも不可欠ではありません。なぜなら、この哲学はなんにせよ絶対的なものである以上、中心にだけあるのではなく、どこにでもあるからです。要するに、批判的な哲学はすべてのものになり、その結果、すべてのものは批判的な哲学になるのです。批判的な哲学は固有の問題領域と対象概念を解体し、これらに取って代わるのが、解放を促進する反省概念です。この概念はつまるところ困であり、そして麻薬です。それは人々を進歩派となるよう促し、そしてその進歩には抵抗できないようにする。批判が認識するのはもはや諸対象ではなく批判にとっての重要性だけであり、そしてそのようにして全てのものは同じとなる。例えば、哲学と政治、ユートピアと自己保存、本業と副業、透明性と不透明性、哲学と個別科学、どの学科もおたがいに同一のものとなり、ただし学科そのものだけはそれ自身のアイデンティティを喪失するのです。

以上を通じてある危険性が生じてきます。すなわちこの総合学問が、解放——それは、いってみれば、専門バカから解放されて総合バカ、いわゆる有用なバカへと突き進むことであり、諸価値の専制から解放されて諸価値の重要度の専制へと突き進むことです——から、同一哲学の体系の戦闘的な戯画になるという危険性です。その戯画においては、もはやすべての牛は黒色に描かれるばかりでなく、すべての専門学科もまた灰色に描かれます。なぜなら、すべての専門学科において同一の事だけが考えられ、そしてもはや他の事は一切考えられていないからです。他の事とはすなわち、総合学問の考えでは悪いものです。つまり、その事が誤っている場合、また用無しである場合にも悪であり、分かりやすくいえば、その事がたとえ正しい場合であっても、都合は悪いものなのです。批判の味方でないものは批判の敵であり、ひいては罪になるというわけです。このようなバッカス神のどんちゃんさわぎでは、すなわち全員が酔わずにいるのを許されない場所では⁷、破門されるのは素面のままでいる人の方です。学問は再び異端視されうるものとなる。学問の研究および研究結果は、救済の名におい

7 [訳注] 言うまでもないが、以上この段落ではヘーゲル『精神現象学』の序文 Vorrede にある、よく知られた記述が念頭におかれている。

て検閲を受ける。そのような検閲から人々を解放してきたのが近代でした。とすれば、それを復活させるのは反近代です。そうした犠牲を犯してまで哲学は批判の名の下で、独断論的に絶対的な能力を探し求めているのです。

β) もう一方の可能性は、懐疑論の継承です。つまり、哲学が良心をもつことから逃げ出して、無責任さのほどよいぬるま湯に浸かり込んだおかげで甘受することになった全面的無能力の立場であり、要するに、哲学あるいは哲学者の不参加です。ここでは、免除の意義、免責の成果、回避の価値はどのみち明白なので、これらについては今さら話す必要はありません。

このような不参加には色々な種類があります。どこか別の場所にいることによる不参加には、多岐にわたって忙しく働くひとや、いつも旅行に出かけている誰もが手馴れています。しかし、常に参加しているわけではないことによっても不参加であることができる（特定の哲学の学派・主義は問題ではありません）。例えば、対話がまだ終わっていないことを理由として、解釈学的な意味で常に参加しているのではないことができます。あるいはまた、対立がまだ生じていないことを理由に弁証法的な意味で、あるいは、主張がそもそも反証不可能であることを理由に分析哲学的な意味で、あるいは、何といってももう一度ボロ口族⁸のところに行かなければならないことを理由に人類学的な意味で、あるいは、まずはグノーシスのより十分な研究を必要とすることを理由に歴史的な意味で、あるいは、いまだ土台や上部構造に待たなければならないことを理由に、ないし誰に待たなければならないのかを絶対的に確立してくれる人に待たなければならないことを理由に歴史哲学的な意味で、あるいは、いまだに可能性の条件が出揃っていない、または多すぎることを理由に超越論的な意味で、あるいは、まだ韻を踏んでいない、またはただ韻しか踏んでいないことを理由に美的な意味で、あるいは、いまだに決定的な述語表現 *Prädikator* が十分な同意をもって導入されていないことを理由に論理再構成的な意味で、あるいは、まだ〔アルファベットの〕「I」の項目までにしか達していないこ

8 〔訳注〕とくにクロード・レヴィ=ストロースの『悲しき熱帯』（原著 1955 年）で記録されて世に知られるようになったブラジルの部族。

とを理由に概念史的な意味で⁹、あるいは、用無しのままにいること、そしてたまたま役に立つ副業をしていないときは眠っていることでまさしく懷疑論的な意味で——でも副業をするような懷疑論者には用心しなくてはなりません——、などなどの仕方ではひとは常に参加しているのではないことができます。このような不参加にとって最もよいことは、いつもそのたびごとに別の哲学をもつためにあらゆる哲学を、いずれにせよ可能なかぎり多くの哲学をもつことです。ここでは哲学的コミュニケーションは、ほかの手段による孤立です。

制度としてそこから帰結してくるのは、参加を邪魔する〔してもらう〕ことの組織化です。ここでも哲学が何か中心的なものになればそれはよいことであり、ここでのセンターは役には立ちます。なぜなら、センターは（他に専門学部や専門学科があるところでは）、主たる参加義務に都合よく衝突する副次的な参加義務があることを正当化するからです。つまり、そこで哲学に、ただし第一の主たるそれに参加するのではなく、副次的な別のそれに、すなわち懷疑の哲学にのみ参加する人は、センターにいれば専門学科のために参加を妨害され、専門学科にいればセンターのために参加を妨害され、そして、まさにこのことによって（これが第三の立場の証です）その人は部外者のための支所で働くことができる。〔一方〕自宅では、その人は若隠居 *emeritus praecox* として、言い換えれば、岩を転がす前にまずは家で自分の岩を工作しなければならない、それも言葉によって無から工作しなければならないようなシーシュポスとして働くことができる。しかし、無からは何も生じない。だから、そういった人が営んでいるのは常に、張りつめた期待を無に一変させることなのです。ご存知のとおり、これはカントの笑いの定義です。このようにしてこの懷疑の哲学——いわば陰気の義務 *tristesse oblige*——はおそらくは陽気なものであり、ひょっとしたら哲学は陰気な学問の時代における陽気さの最後の避難場所であるのかもしれないが、ただし陰気な避難場所でしょう。なぜなら、そのようにして笑う人には笑うべき何ものもないからです。

9 〔訳注〕著者の師であった J. Ritter を主たる編者の一人として 1971 年から発行が始まり、また著者自身も編集に加わった概念史研究の集成『歴史的哲学辞典 *Historisches Wörterbuch der Philosophie*』は 2005 年になって全 13 巻が完結したが、当時はまだここまで世に出ていなかった。

※

これから言うことが、私の最後のまとめになるのですが、哲学の能力が不確実になり、哲学が無能力になり、能力への憧れを強めているところでは哲学は結局すべてになろうとするか無になろうとするかのどちらかです。私は、二つの可能性について考えてきました。この両者は、自分たちにとっては好ましくないかもしれませんが、お互いどうし瓜ふたつなのです。いずれも、哲学が能力削減の思いに迫られて行う埋め合わせなのです。つまり、二つの可能性とは無能力を補うことである。これによって、哲学の能力、つまり哲学の無能力を補う能力について語ることが正当化されるのでしょうか。みなさんは「能力 Kompetenz」という語の概念史的に特化された使われ方を考慮されてもよいでしょう。それは教会法の内部に見出される使われ方です。つまり、そこでは *competentia* とは聖職者扶養に関する専門用語であり、この扶養は、聖職者が身分に応じた生活を送るために必要で、それゆえ個人による勝手な売買を許さない資格なのです。どうして語のこのような使われ方を考えてもよいのかというと、この意味——〔余談ながら〕これに関して、マルクス、ニーチェ、フロイト、ハイデガー、アドルノのような、疑うことが大好きな諸学派を経めぐってきた人は、身につけた猜疑心から、〔正しくも〕次のように訝ります、すなわち、きょうび言語のコンピーテンスについてあれこれ議論する人々が、彼らの学問的なパフォーマンスにおいて、どうしてこの意味についていかなる注意も払わないのか、と——すなわち *competentia* のこの意味は、聖職者なるものが可能であるための条件、つまりあの鍵の権能 *potestas clavium* の可能性の条件へと関心を促すか、そうでなければ現役を退いた聖職者がもらう最低限の手当てへと関心を促すからです。そして、これらこそがじっさい私が描きだした二つの可能性であり、それらの可能性、つまり絶対的な鍵の権能 *Schlüsselgewalt* によってか、もしくは余生 *vita postuma* によって、哲学は自身の無能力を補っているのです。もちろん能力というと、何かなしえたということを私たちに連想させます。しかし、私が言ったのは何もしえなかったということなのです。私は以下のことを未解決のままに残し、保留しつつ言いますが、哲学はもはや失敗するチャンスすらもってい

ないのかもしれない。しかし、ひょっとしたら哲学にはチャンスすらもっていないというこのことを認めるチャンスしかないのかもしれない。ところが、そのとき哲学はどのような全権ももっていないし、全権そのものであるのでもなく、せいぜい何かを代わりに行うだけでしょう。哲学がこのことを考慮したとき、ひょっとしたら、哲学は人間的になるのかもしれませんが。というのも、人間とは何かを代わりに行うような存在だからです。

仰せつかったところでは、私はここで哲学の能力と無能力についての講演をしなければなりませんでした。その代わりに私が行ったのは講演の代わりに私が行ったことであり、つまり反講演を行いました。もはや肖像画すら似せようとまったくしない時代において回想録は事実と似せていなければならないのだろうか、とマルローは彼の『反回想録』で疑問を投げかけた。私は——公には語りえないことを人間に認める基本権を、完全透明化が言われる世の中であえて喚起することで——当の疑問を講演一般にまで応用することはしませんが、この講演には応用します¹⁰。ところで私はまさにいま講演を終わらせるところであることをあえて強調しなければなりません。これは、私が永遠回帰の何とか原理にしたがって今すぐにまた講演をするのではないのかというおぞましい考えがあなた方に浮かばないようにするためにです。なぜなら、私は次のように結論するからです。

中国の故事にこんな話が伝えられています。むかし死刑執行競争の決勝戦があり、片方がピンチを迎えた。先に死刑を執行してみせた彼の競争相手によるほとんど完璧な打ち首の刑を技で越えなければならなかったのである。緊張の一瞬。彼は鋭いひと太刀を振るった。のだけれども、打ち首にされるべき者の頭は落ちることなく、だからまだ打ち首に処せられていないようにみえる死刑囚が、死刑執行人をなぜなんだという驚きの眼でみつめた。すかさず執行者は当の頭に言ったそうです、「領いてくれよ」と。

10 [原注] 確かにこの講演はストレートに解されると専門家の良識に反している。この講演が哲学を——批判の独断論に対しても、虚無の懐疑論という立場に対しても——目下のところ疑いの目で見るべきものとして提示したからである。しかし、遠回しには結局その反対である。とくにこの講演が哲学は何もできないということを語りながらも、哲学が何かできるということの分析を誘発しようとする弁証法としても読まれるならば、なおさらそうである。[専門家の良識に反しない] というのは、専門としての哲学は実に揺るぎない生命力を次のような余力があることによってこそ証明するのであるから。すなわち、哲学はまさに[私のような]哲学ムラの札付きの(自身の本業に関する)敗北主義者を、チアリーダーの代表に起用するという余力である。

私にとって興味深いのは、この頭が顔く前に何を考えているかである、と私は言ったのでした。なぜならそれは、哲学が自分自身について考えていることに似ているに違いないだろうから、と。みなさんが少なくとも 45 分前から私に尋ねたくてしかたがないのは、次の問いだけなのかも知れません。「それでつまり、いつ顔くのかな？」